

掲載記事の無断転載転写を禁じます

平成9年9月30日発行

鵠沼

久久比奴末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 7 5 号

東屋旅館の歴史をたずねて

『東屋の離れ』——現杉沢邸に見るその面影

-----	本誌編集委員会	-----	1	
『葛巻文庫』の誕生に至るまで	-----	佐藤和子	-----	13
大分賀来神社訪問記	-----	高木和男	-----	20
葉山家の人々	-----	若尾肇	-----	22
松岡静雄先生が				
海軍をやめられた事情について	-----	高木和男	-----	36
「鵠沼を語る会」活動の記録	-----	本誌総務委員会	-----	39
編集後記	-----			43

久久比奴末 とは「新編相模風土記稿」(天保12年、1841)

にも出てくる言葉で“くくいぬま”と読み、鵠沼の地名の起こりともされます。

鵠沼を語る会 発行

東屋旅館の歴史をたずねて

『東屋の離れ』

——現杉沢邸に見るその面影

本誌編集委員会

文人たちの宿として有名だった鵜沼の割烹旅館「東屋」は、昭和14年9月11日に廃業した。もう58年も前のことになる。

壮大だったといわれる旅館の面影をとどめるものは、いまやほとんど姿を消してしまっただが、わずかに3つのものが今もなお旧敷地内に残されている。

ひとつは旅館裏門の門柱である。東屋最後の経営者長谷川欽一の時代に建てられたとされる2本の門柱のうちの1本が、開発の波の中でかろうじて残った。

もうひとつが亭（ちん）とよばれた茅葺きの離れである。いまは江守邸の一部として使われている。かつては同様のものが旅館の庭内に点在していた。

そして3つ目のものが、「東屋の離れ」と称された二階建の家屋である。現在は杉沢邸となっていて、部屋の間取り、配置などはかつての時とほとんど同じ状態で、いまもなおいわば現役として使われている。

この3つはいずれも関東大震災後に再建されたものではあるが、鵜沼にとっては貴重な歴史的財産といえるだろう。

今回、「東屋の離れ」の現在の所有者である杉沢きよさんにお話しを聞くことができた。また杉沢さんには家屋の間取り図の採録、その公表についても快く許可していただいた。東屋にかかわる貴重な資料として、感謝の念とともに記録しておきたい。

杉沢きよさんは、現在88歳。3人のお子さんたちが独立して、目下独りでこの「東屋の離れ」だった自宅を守っておられる。耳こそやや不自由にはなされたものの、とてもお年には見えない元気で明瞭な記憶を保っておられた。「東屋の離れ」に住むようになったいきさつなども、明確に話していただいた。

感銘深かったのは、杉沢さんが現在の自分の住まいを、はっきりと「東屋の離れ」だったと意識されていることであり、可能な限りその原型を保存しようという意志をお持ちだったことである。補修工事などにも細心の注意を払い、原型を損なうような大改修はなるべく避けているという。

とくに印象的だったのが、家の中の端正さであった。どの部屋も掃除が行き届

いていて、とくに廊下、縁側の板張り、障子の棧などには、長い時間をかけて拭き込まれた木目だけがもつ美しさが、見事に浮き出ていた。家屋全体に、いかにも古きよき時代の懐かしい風情が漂っていたのである。

最近、関西の女子大生などで東屋に関心をもつ人が多くなり、卒業論文のテーマとして、杉沢邸を訪れることも増えているという。

東屋の歴史を伝える数少ない“証人”ともいえるこの建築物が、高齢のご婦人の細々とした手で保たれて来たことに、深い感謝の気持ちを覚えずにはおられない。

※

杉沢さんは、戦後、辻堂へ土地を求めて東京から移ってきた。しかし、ご主人（すでに故人）の勤務先が東京都庁であったこと、子供たちもまた東京の大学に通うようになったことなどが重なったため、昭和32年、通勤通学に都合のいい鵜沼へ家を求めてやってきた。

その時、不動産屋が案内してくれたのが、現在の家だった。それがかつての名だたる旅館「東屋」の一部であり、買い取ったのが「東屋の離れ」と呼ばれていた建物であるということは、その時に知った。

ただ下見に来たときの「東屋の離れ」は、長年放置されていたせいもあって、その荒れようはただごとではなく、畳の上をゲタで歩かなければならないほどであったという。住み移ってから、目の前の大きな池にはたくさんのカエルがいて、水面をヘビが泳いで渡るのを何度も目撃した。

しかし、杉沢さん一家は間もなくこの「東屋の離れ」を明け渡した。この家を貸してほしいという人が現れたからである。小説「富士に立つ影」の作者・白井喬二であった。杉沢邸を借り受けるについて、白井が示した条件は、一軒そっくり借り切って月3万円の家賃ということであった。「値段の風俗史」（朝日新聞社）によると、昭和35年当時、東京・板橋あたりで6畳、4畳半、3畳、台所、洗面所付きの一軒家を借りて、月の家賃は二千四百円だったとある。また、今回の訪問に同行した佐藤会員の記憶によれば、昭和37年、松が岡のお屋敷内にあった二軒続き離れ（六畳、二畳、台所付き）が月六千円したという。その相場からいっても、白井が示した条件は悪いものではなかった。たまたま子供の学費の捻出に迫られていた杉沢さんは、幸便のこととしてこの話を受け取り、一家は片瀬の仮住まい先へ移った。

この当時、白井は69歳である。白井の年譜には、昭和33年から3年間、この「東屋の離れ」で静養生活を送ったとある。前年に「富士に立つ影」が東映で映画化され、新聞小説「国を愛すされど女も」の連載を終えたばかりのころであった。小説家としてももう高齢とっていい年であったが、長年、持病の高血圧症に悩まされていて、10年ほど前から伊豆、大磯などで転地静養生活を続けてい

た。

鵠沼へ来たのもその静養の一環と思われる。家族は東京・中野に置いており、杉沢さんの記憶では、この鵠沼時代、白井は書生と女中を一人づつ置いてともに住んでいた。

昭和33年といえば、むろんのこと東屋はすでに廃業していたが、白井は鵠沼の地のかつての歴史を承知したうえで、杉沢邸を借りあげたのではないかと思われる。この歴史的な地で、白井は小説家として最後の仕事をしようとしたのであろうか。そうした意味では、白井喬二もまた東屋の歴史の一端に連なる文士の一人とっていいのかも知れない。

ただ残念なことに、白井の年譜は鵠沼時代の足かけ3年間、ほぼ空白の時代となっているのである。『週刊新潮』に「豹磨あばれ暦」の連載を始めたものの、4回で中絶していて、その後もこの滞在期間の作品らしいものはほとんどない。鵠沼時代は、体調がよほど思わしくなかったのであろう。白井は鵠沼を去った後、ふたたび旺盛な筆力を取り戻す。

現在、杉沢邸の一階居間の欄間には、「江望荘 白井喬二」と書かれた額装の色紙が飾ってある。鵠沼を去る際、杉沢さんの求めに応じて白井が書き残したものである。

白井は杉沢邸の、とりわけ二階南側の部屋からの眺めが気に入った。

その「二階八畳の部屋」を執筆の場所にし、江の島が目あたりに望めることからこの家を「江望荘」と名付けたのであった。

※

おいおい述べていくが、現在杉沢邸となっているこの「東屋の離れ」は、関東大震災後に建てられた。大正13年末ごろではないかと思われる。

昭和8年に出版された『現在の藤沢』（加藤徳右衛門著）には、東屋はこの大震災の際、「全潰し且つ怒れる潮流は全部を浸し」と記してある。建物は倒壊し、さらにその建物全体が津波で洗われたのである。

東屋はこの津波に洗われた材木を再利用する形で再建されることになるのだが、現在の杉沢邸である「東屋の離れ」も、この時同じ状況で再建されたもののようである。

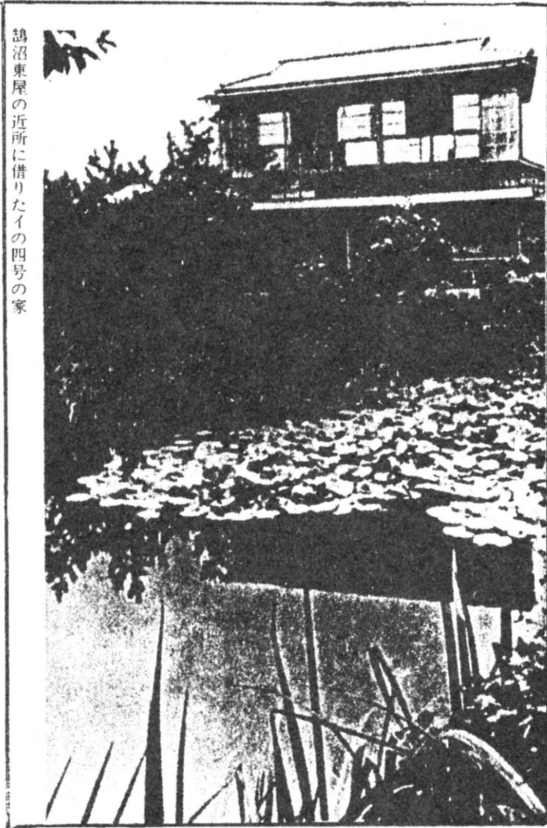
再建の際、東屋の建物の構造はいくぶん変わった。

たとえば震災前の「東屋の離れ」は、渡殿と呼ばれる廊下で本館とつながっていた（それは里見弴の小説『潮騒』に克明に描写されている）が、再建後は渡殿が消え、離れは独立した棟となり完全な「離れ」になった。

この震災前と震災後の東屋の建物については、当「鵠沼を語る会」の会員である西忠保、有田裕一両会員が古老からの聞き取りでその概略図を完成させた。この貴重な資料は平成6年1月発行の『鵠沼 69号』に掲載してある。このことに

ついては、後にまた触れる。

昭和55年、新潮社が『新潮日本文学アルバム』シリーズの1つとして『芥川龍之介』号を出している。龍之介の鵠沼でのスナップも幾枚か掲載されていて当時の鵠沼の様子もしのぶことができるが、その中に芥川が「鵠沼東屋の近所に借りたイの四号の家」として、池の端に建つ一軒の二階家が写っているのである（写真）。



新潮社『新潮日本文学アルバム』から

この写真に写された二階家こそが紛れもなく「東屋離れ」であり、現在の杉沢邸なのである。

写真前面にある池が、かつて多くのカエルやヘビがいた池であり、いまはすでに埋め立てられて姿を消して、跡地には別の建物が建っている。

※

実は鵠沼の東屋の歴史に触れた著作物の中には、誤った事柄をそのまま記述したものが非常に多い。これまできちんとした調査がなされなかったせいとも思われるが、この『新潮日本文学アルバム』の「イの四号の家」も、そうした誤った記述の代表的なもののひとつなのである。

芥川が借りた「鵠沼東屋の近所のイの四号の家」というのは、正しくはこの「東屋離れ」からやや東北に寄った

ところであって、現在は東屋の始祖・伊東将行の孫にあたる方の家になっている。

芥川は東屋本館に逗留したり（本館の時は二階南端の七号室に泊まった。後掲図参照）、家族連れの際はイの四号に泊まったりした。

確かにさまざまな文学案内書に芥川が「東屋の離れ」に泊まったという文章を見ることができるが、それが現在の杉沢邸のことであるのかどうか、少なくとも現時点では断定できない。

関東大震災前に、「東屋の離れ」に逗留した文人としてはっきり推定できるのは斎藤緑雨、谷崎潤一郎、竹林夢想庵の3人だけである。そのことについては後に述べる。

誤った記述ということではさらにいえば、昭和33年に出版された筑摩書房『芥川龍之介全集 第3巻』の巻頭にもこの『新潮日本文学アルバム』とまったく同じ

写真が掲載されていて、これもまた芥川が泊まった宿として紹介されているのである。『新潮日本文学アルバム』はこれに従ったものであろうか。間違いが踏襲されている感がある。

この筑摩版の龍之介全集に関して、杉沢家にはひとつの思い出話が伝わっている。

大学に通っていた息子さんが、湘南電車の座席に座っていたとき、隣の客がこの筑摩版の全集を開き巻頭写真に眺め入っていた。横目で見ているうちそれが自分の住んでいる家だったので、息子さんは思わず「これ僕の家です」と叫んでしまったという。隣の客はすっかりおもしろがって、その場でこの本を息子さんに進呈してくれた。40年近くも前の話だが、その本はいまも杉沢邸の居間の本棚に飾ってある。

※

さて、私どもが「東屋の離れ」である杉沢邸訪問を思い立ったのは、以下のような理由からであった。

東屋に関して伝えられている資料は、現在、驚くほど少ない。東屋の開発、経営に携わった伊東家、長谷川家にしても、旅館そのものに関する資料はほとんどといっていいほど残されていないのである。

東屋に逗留した文人文士たちが書き残した作品、文書などから旅館内部のおおまかな様子を推定することはできるけれども、たとえば廊下の幅がどれくらいあったのか、部屋の間仕切りはどのようになっていたのか、洗面所、便所などの構えはどうだったのか、そうしたことは具体的にはもうほとんど分からない。今後、時間がたてばたつほど、そのことはさらに分からなくなっていくのであろう。

そうした中で杉沢邸が、かつての東屋の内部の様式や雰囲気を、より具体的に伝えてくれているのではないか――。

私どもはそうように考えたのであった。

そして杉沢きよさんが私どもの勝手な願いを聞き届けてくださり、ご親切に家の内部を案内していただいた時、私どもは自分たちの考えが間違っていなかったことを確信した。杉沢邸には、かつての旅館東屋（震災前のものもふくめて）の面影をしのばせるものが、まだ十分に残っていたのである。

もっともこの確信は、素人の印象に基づくものに過ぎない。私どもには家屋に関する基本的な知識の持ち合わせがない。たとえば個々の柱にしても、欄間の造りにしても、明かり取り窓の造りにしても、それぞれに建築史学的な判断が必要であらう。それが私どもにはできない。

たとえばどこかの大学の建築史研究室などが専門的な調査に乗り出してくれないものかと、杉沢さんの話を聞きたいまは心底そう思う。

ともかくも杉沢さんのお許しを得て、間取りの採録を行った。採寸、採録をしたのは先に東屋の概略図を作成した西忠保、有田裕一両会員である。その結果は次ページに掲げた通りの力作となった。

杉沢さんによると、白井喬二は「この家は部屋に差別がないからいい」といったという。先にも述べたように白井はこの家に書生と女中とともに住んだ。

かつての日本の住宅の習慣からいえば書生部屋、女中部屋という特別な部屋があり、その上に一段と格式の高い部屋が用意され、それが家長のものとなるのであろうが、しかし、「東屋の離れ」は旅館である。部屋の広さに伴う料金差はあっても、客に差別がないように部屋も基本的には平等である。白井はその平等さが気に入ったのであろう。

図で見るように、確かに各部屋は見事な平等ぶりを見せている。

作図した西会員の印象では、外観は当時の別荘の造りと変わらないが、内部は旅館にふさわしい造りになっていた。

一階は八畳2間、二階が八畳と六畳。造りは田舎間であり、広々とした感じがある。とりわけ縁側の広さが、通常の建物より1尺多い4尺幅になっていて、いかにも眺望を売り物の一つにした旅館らしい造りになっていた。

二階縁側の障子は雪見障子になっているが、普通上に引き上げる腰障子が左右に開ける観音開きになっていた。

部屋に入り、まず受ける印象は涼しげな感じと、広々とした爽やかさである。その理由のひとつは天井が高いせいかと思われた。現在の一般家屋の天井よりも、確実に30センチは高いであろう。

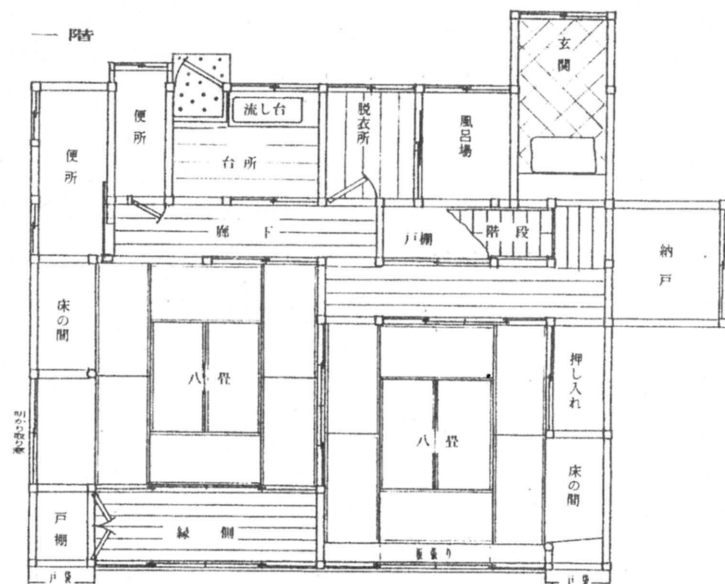
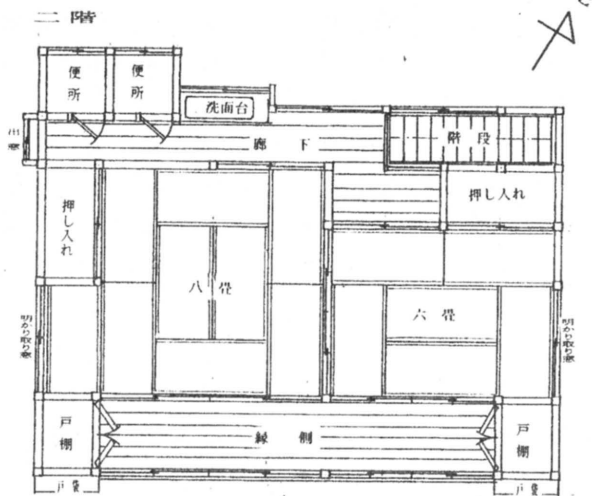
どの部屋もそこに座ると、何とも言えない落ち着きと懐かしさを感じることができる。それぞれの部屋が、日本家屋独特の何ものかを保持しているせいであろう。その独特の何ものかを説明するのは、極めて難しい。端的に言えば、新建材を使わぬ家が持つ一種の安らぎということになろうか。

杉沢きよさんの話では、この建物は床下の丈もまた非常に高いという。池の端に臨んで建てるという条件、さらには台風、大雨、津波などにも配慮した造りではなかろうかと、同行した有田裕一会員はいった。有田会員は鵠沼開発初期に先駆的役割を果たした有田金八の孫であり、鵠沼には三代にわたって住んでいる。そうした父祖から受け継いだ知識に基づいての感想であった。

家の向きは当然のことながら、東南側をフルオープンにし、西側、南西側の西日、台風の風当たりに留意し、玄関は北側に設けてある。すべての部屋に日光と風が通るように考慮されてある。

風呂場には、外から直接入れる小戸があった。海から帰って来て砂のついた足でもそのまま入れる仕組みで、夏に利用の多かった建物らしさがこんなところに

東屋離れ間取り図



無断での転写転載を禁じます

西忠保 有田裕一作成

も残っていたのである。

ただし東屋時代、ここに風呂があったかどうかは疑わしい。武林夢想庵は、この離れ（もっとも震災前の離れだが）から、はるばる廊下を伝って玄関側にあった風呂場まで行ったことを書いている。従って、杉沢邸の風呂場は、旅館廃業後に造りつけられたと思われるのである。

ついでに言えば、現在の杉沢邸の風呂場は小さな岩風呂風になっていて、水道の蛇口をひねると積み上げた岩の間から水が流れ出す仕組みになっている。これは白井喬二がこしらえたものであった。白井はそれなりに鵠沼生活を楽しもうとしたのであろう。いまでは「江望荘」の色紙とともに、白井の思いがけない置き土産になっている。

さて、洗面所は各部屋にはなく、共用のものが廊下に1つだけあった。

こうした洗面所は、離れだけでなく本館の廊下にも幾つかあったらしく、武林夢想庵はたまたま同宿していて後に妻となる作家・中平文子が、朝方、この洗面所で無然とした表情のまま歯を磨いている様子を書き留めている。

「東屋の離れ」の部屋の間仕切りは、すべて襖だけである。咳払いひとつしても、それは隣部屋へ筒抜けになった。これは本館もそうであったらしく、日本式旅館の常として各部屋のプライバシーはほとんどなかった。

たとえば斎藤緑雨は、朝方ふと目を覚ますと、廊下の障子が開いていてそこから小さな子供がジッと自分の寝顔をのぞき込んでいたことを日記に書いている。また緑雨は、隣り部屋に泊まったカモ撃ちの客が、早朝、「鵠沼って寒いな」とつぶやくのを布団の中で聞いたとも書いている。

夢想庵が、中平文子と親しくなった後、本館の二階にあった文子の部屋を訪れて話し込んでいるうち、隣部屋からドッと笑い声が響いて来た。驚いて境の襖を引き開けると、隣部屋の客で、胸を病んでいる慶大理財科の学生が、宿の女中たちとトランプをしながら二人の話に聞き耳を立てていた。そうしたことも夢想庵は書いている。

杉沢邸のこの図をみていると、緑雨や夢想庵の書き留めたそうした宿の様子までが、現実のこととしてははっきりと理解できるのである。

引き続き、部屋の様子を見てみよう。

各部屋の床柱はそれぞれに違った種類の自然木を使用し、それぞれの趣を出すことに成功している。天井板もすばらしい。ただし豪華な別荘や高級な料亭などで見られるような高価な銘木が使われているということではない。それは先にも言ったように、この離れは震災後の急ごしらえのものであり、廃材を使用したということもあるのである。

一階の廊下の柱が、一般に使う3尺、6尺の間隔ではなくて、しかも柱の片面を壁に塗りこんであるというのも、印象に残ったことのひとつであった。

また一階西端の便所も、果たしてもとから便所とされていたかどうか、はっきりしない部分である。有田会員は、方位を気にするならば、西側に便所は設けな

いはずであるという感想を持った。また、同行の西忠保会員は、この西側の便所はその広さからいっても洗面所もあったのではなかろうかと推定した。

現在の台所は、杉沢さんが住むようになってから造られたものだが、もともとここには配膳台があったというのが、西会員の推定であった。

確にかつての文士たちが書き残した文章を読んでも、食事は賭場でつくられ、それぞれの部屋担当の女中たちがお膳にのせて配って来たことになっている。客が食事をする間、係の女中はその正面に斜め向きの形で座って給仕をしたのである。従って離れに台所は必要なかった。

また二階の便所付近から降りてくるはずの柱も、途中でストップしている。このところの詳細な理由は分からない。

最近、鵠沼に建てられる家の多くは、二階南側に縁側などを設ける余裕はほとんどないが、「東屋の離れ」の縁側はテラスの役も果たしていた。縁側の雨戸、ガラス戸の形式は、いわゆる掃出窓である。北側の廊下は、北風が直接部屋に吹き込まぬ効果を持っていると思われた。

二階縁側からの眺めは、確かにすばらしい。いまでこそ海に向かった方角に家並みが建て混んでいて、江の島もその屋根の間からちらりと見えるに過ぎないが、それでも空が前方に十分に広がっていて、かつての文人たちがこぞってほめそやしたおおらかな景観をはっきりと感じとることができる。

※

東屋に逗留した文人文士は数多いが、東屋内部の様子をこまごまと書いた人は、実はあまりいない。そうした中で割りと具体的に旅館内部を描写した文人をあげれば斎藤緑雨、武林夢想庵、宇野浩二あたりになるであろう。

中でも武林夢想庵は、この「東屋の離れ」と最も縁が深いうえに、旅館内部の様子を実にこまごまと書いているのである。

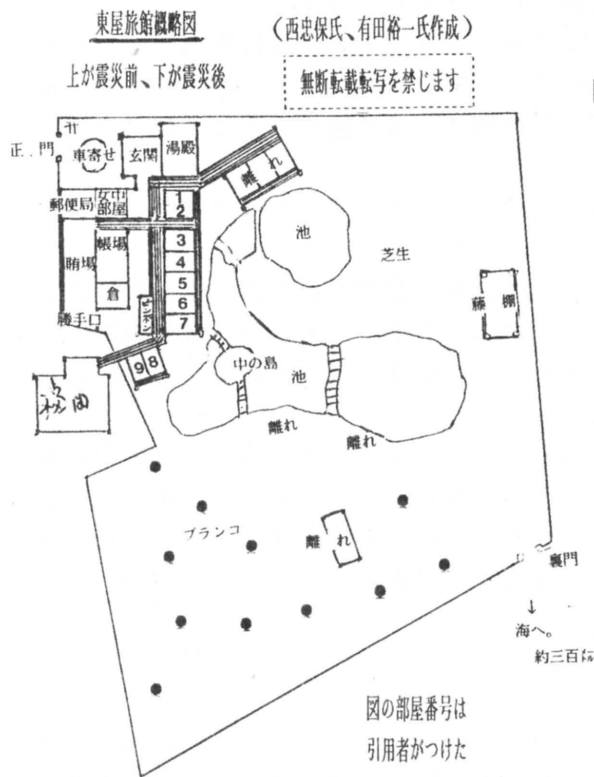
たとえば中平文子と出会った当時のことを自伝的に書いた『性欲の触手』には、東屋の内部（むろん震災前のものであるが）が具体的に述べてある。

夢想庵の描写に従って、当時の東屋を推定してみたい。西忠保、有田裕一両氏が作成した東屋の震災前の概略図（次ページ上図）が、極めて貴重な手掛かりとなる。

夢想庵が東屋に滞在したのは、大正9年2月末のことである。ほぼ1カ月近く滞在し、3月末には文子の自宅である東京・芝の家に転がり込み、4月には帝国ホテルで結婚式をあげるのである。ともあれ夢想庵は、東屋へやったきた。逗留した部屋のことを『性欲の触手』に次のように書く。

「とにかく私は鵠沼の宿屋にいたのだ。詳しく云えば、その宿の九号室で、鯉の沢山いる池や茶室や亭を適当に配置した、松や砂がその白と緑のニュアン

スを心地よく漾わしあった大きな庭園、その庭園を前景としたノンビリとした海が、江の島が、恰も青春の夢の残塊のように、朝夕ウイスキーの角壺を載せた私の机の上へ、飄渺と訪れて来ると云った二階の八畳間だ」



この「宿の九号室」が、図の9号室の二階である。それは同じ『性欲の触手』の次のような文章から特定できる。

「上下に二間ずつあるこの一棟は、左翼に於けるこの宿の最尽头に位しているので、一旦階段を下った者は、戻って便所へ赴かないかぎり、否でも応でも、歩けば自然と中央なる玄関へ足先の向くように、棟毎に異なった各様の廊下が、目まぐるしく曲折している」

「最尽头」はハズレと読む。この文章は旅館内側から玄関を向いた視点で描かれている。すると「左翼に於けるこの宿の最尽头」というのは、当然ながら図の9号室のある棟ということになるだろう。

西、有田両会員は、先にも述べたように震災後の東屋の建物の配置も作成している(下図)。その概略図によると「上下に二間ずつある」「この宿の最尽头」の棟は、震災前は渡り廊下(渡殿)で結ばれていたものの、震災後は渡り廊下が消え去って、この棟だけが独立した離れになっているのである。

この独立した離れこそが、現在の杉沢邸なのである。

震災後、東屋はその再建資金に苦勞したようである。

この当時、東屋の実質的な経営者は、画家長谷川路可の母である長谷川たかであった。たかの甥であり長谷川家の家督相続者であった長谷川欽一は、この時フランスに留学中で、震災後、急きょ呼び戻されて東屋最後の経営者の座につくのである。

たかと欽一は再建資金を捻出するため、旅館敷地の東北部の一部を分譲している。そのことから再建の苦勞ぶりはうかがえるのである。渡り廊下が消え去って、離れが文字どおりの離れになったのも財政的な理由によるものと思っていだろう。手の込んだ渡り廊下などは、思い切って省略したのである。

さらにいえば、「東屋の離れ」の図でも分かるように、この棟には便所が4カ所もある。旅館建築としては当然の構造であろうが、再建に際しても便所の場所をそうたびたび変えるわけにもいくまいから、こうした基本的な設備を中心に、従前とほぼ同じ構造で造り直されたと考えるのが自然であろう。

すると「東屋の離れ」の構造、間取りは、渡り廊下などが消え去りはしたものの基本的な設備は、震災前も震災後もあまり変わらないという考えが成り立ちはしないだろうか。この独立した離れこそが現在の杉沢邸であり、かつての東屋の面影や様式が残っていると推定する理由もそこにある。

当時の設計図など確固たる資料がないから断定は慎むべきだが、その可能性は十分に高いと考える。

つまり武林夢想庵と白井喬二は、建て替えられこそしたが、ほぼ同じ造りの「二階の八畳間」にいたという推定が成り立つのである。

夢想庵が眺めた「鯉の沢山いる池」というのは、先にあげた写真の池であり、白井も同じ視点で鵠沼の風景を眺めていたことになる。

前に「私どもは自分たちの考えが間違っていなかったことを確信した」と記したが、その意味はこういうことだったのである。現杉沢邸は、明らかに震災前の「東屋の離れ」の面影さえもはっきり伝えていると以为ていいと思う。

※

武林夢想庵は、この「二階の八畳間」についてさらに次のようなことも書いている。前夜、深酒をして朝寝をした時のことである。目を覚ますと宿の女中たちが声高にしゃべりながら廊下の掃除をしている。するとそのうちの一人がいうのである。

「いつぞや、この九番にいらした谷崎さんなんぞは、それこそ大変な騒ぎだったわ……昼寝て夜通し起きていらしてね、それで何枚も何枚も書き潰しばかりなさってね、一日かかって、それはホンの僅かしきやお出来にならないようだったわ……だから大したものよ、小説を書くなんて……」

すなわち九号室には谷崎潤一郎も滞在していた。

年譜によると谷崎は大正7年3月から同9月まで東屋に二度目の逗留をしたことになっている。夢想庵の滞在から2年前のことである。

さらに逆上ると、明治33年10月23日から翌年4月12日までこの東屋に逗留した斎藤緑雨が、その大半の期間を、この9号室で過ごしたことが推定されるのである。それは緑雨が滞在期間中につけた日記から明らかに読み取れる。

緑雨はいったん本館の部屋に案内されるが、11月14日に「二階の部屋」に移された。それがこの9号室と思われる。

部屋を変わったその日の日記に緑雨は、

「砂浜一ト目ニ見ユル 窓カラ富士嶺ノ白キ」

と書いている。9号室には西向きにも窓があって、そこからは居ながらにして富士が望めた。

現在の杉沢邸に二階8畳間には、押し入れの横に明かり取り窓が造りつけてある。いまもそこを開けると――残念なことには前方に住宅群があって富士そのものはもう見るべくもないが――富士、丹沢方向の空が広く望めるのである。

緑雨の時代に、この明かり取り窓があったかどうかは分らない。しかし、いずれにしろ居ながらにして富士が望める部屋は、東屋の中でもこの離れしかないのである。

「東屋の離れ」には斎藤緑雨、谷崎潤一郎、武林夢想庵という極めて特異な3人の文人がいずれもながながと逗留し、震災後はほぼ同じ造りで再建された部屋に白井喬二が留まった。そして現存する杉沢邸は、東屋の歴史を語る資料的価値を十分に持っている――。

そう結論づけていいように思う。

※

駆け足だが、以上が杉沢邸の訪問記である。杉沢きよさんにはあらためて心からお礼を申し上げたいと思う。

同時に、建築史の専門家による杉沢邸の本格的な調査が一日でも早く実現するのを願いたい。むろん杉沢きよさんの了解さえ得られれば、という前提のうえである。こうした調査の実現は、鶴沼の歴史に関心をもつものの夢でもあるのである。

なお、今回の杉沢邸訪問には当「鶴沼を語る会」の西忠保、有田裕一、佐藤和子、高三啓輔の四会員が参加した。間取り図の採録は先に述べたように西、有田が担当した。お互いの情報を持ちよりこの文章にまとめた。まとめた文章の責任は高三にある。

「葛巻文庫」の誕生に至るまで

佐藤 和子

(鵠沼を語る会会員)

芥川龍之介の姪で、鵠沼在住の葛巻佐登子さんが、長い間、独りで守って来られた龍之介ゆかりの資料が、1996年5月、藤沢市文書館に寄贈され、『葛巻文庫』として保存されることになった。佐登子さんが高齢になり、独りでの生活が困難になったことが大きな理由だったが、文庫誕生までには地元のケースワーカー、老人ホーム、藤沢市老人福祉課、文書館さらには当「鵠沼を語る会」メンバーの努力があった。

文庫誕生発端からの経緯を、中心的に動いたメンバーの一人である佐藤和子さんにまとめてもらった。

(編集委員会)

葛巻さんとの出会い

和服にきちんと身をつつみ、髪を束髪にされた小柄な方が「鵠沼を語る会」にお見えになったのは十四、五年程前のことでした。物静かなこの方が芥川龍之介の姪ごさんに当たる葛巻左登子さんだと知ったのは、それから暫く経ってからのことです。いつも控え目で、皆さんのお話にじっと聞き入っておられた姿が目につかびます。

その葛巻左登子さんが、やはり「語る会」の会員でいらした富士山（ふじ・たかし）さんと、よく竜之介のことについて話しておられました。東家での日々、イの四号（東家近くの借家）での生活、鵠沼滞在中の健康状態、多加志、比呂志、也寸志の三人のお子さん方、いわゆる「月光の女」について等々、私たちもついつい聞き耳を立て、いろいろとお訊ねしながら親しくさせていただきました。

龍之介が「西洋皿一枚と缶詰の簡易生活をしたい」という気持ちで移り住んだ鵠沼には、妻文さんの実家があり、海に近く潮風を浴び、松風を耳にしての日々でしたが、体調は決して良くなかったようです。書簡集（岩波書店『芥川龍之介全集』第8巻）に収録された小穴隆一宛の手紙には、

「拝啓 度々御手紙ありがたう。僕はここへ来る勿勿下痢し、二三日立って

又立てつづけに下痢し、とうとうここのお医者にかかってしまった。

お医者 of 姓は富士、名は山、山は「たかし」と読むよし、唯今弟についてある看護婦について貰ひ、やっとパンや半熟の卵にありついた次第、下痢のとまり次第帰京したい。

一人で茫漠の海景を見ながら横になつてゐるのは実に寂しい。以上

六月二十日

芥川龍之介

小穴隆一様」

とあります。文中に弟とあるのは、龍之介の妻文の弟のことです。

診療に当たった富士先生は、御自身の病気で東京大学付属病院内科医局を引かれたあと、長いこと現在の松が岡にお住まいで、当時瞑目しながら松林の中を散歩している龍之介に出会ったこともあるそうです。

「御気分は如何と尋ねると氏は黙って頷いた。相変わらずと云ふ意味だらうと察した」

これは、富士山さんが文芸春秋昭和10年10月号に「龍之介氏の憶ひ出」と題して書かれた中の一節にあり、そこには病状、処方した薬等についてもカルテを基に触れられています。文学にも明るく「鵠沼を語る会」の歩み出しの頃は、この会を名実ともに引張って行って下さいました。

先日、鵠生園で静養されている左登子さんをお訪ねした際「なぜ語る会に入られたのですか」とうかがいましところ、「富士先生からあなたは龍之介の姪なのだからぜひ入会して下さい、と強く勧められて．．．」と笑いながら話してくださいました。「本当に富士先生にはお世話になったのよ。先生は龍之介の書簡集などしっかりお読みになっていて、斎藤茂吉と薬のことはじめ、いろいろと関心をもたれてね」など、とても懐かしそうに話をされたお顔が印象的でした。

左登子さんは叔父芥川龍之介の晩年の消息を診察を通して知っておられた医師ということで、よく富士さんとお話になっておられたのです。

葛巻左登子さんは、葛巻義定、ヒサ（龍之介の実姉）の長女として明治四十年に生まれましたが、その後母ヒサの離婚により、兄義敏と二人で母方の祖父新原敏三（つまり龍之介の実父）の下で育てられました。

この兄、義敏さんは若き日、武者小路実篤の「新しき村」への入村を強く望み、それは実現しなかったものの、武者小路から「芥川君が叔父さんなら今後は万事芥川君に教えてもらいなさい。」との薦めもあって、以後龍之介の義敏さんへの

のともせず、庭には野菜を育て、収穫を楽しみに、又庭木を大事に大事にし、他所から来た弱々しい木でも「大丈夫、絶対に根付かせてみせますから」と丹精込めて世話をしておられました。

その頃は、立て付けの悪くなった門の木戸を自分なりに修理され、家に吹き込むスキ間風を防ぐ手だてをされたり、お買い物にも、公民館へも気楽に出掛けておりました。

左登子さんは「鵠沼」二十二号に「芥川龍之介鵠沼寓居跡の葉蘭について」という一文を載せております。龍之介の病氣見舞に斎藤茂吉、土屋文明が持参したとされていた「葉蘭」を見に、かつての二階建ての庭先まで御案内いただいたこともありました。ただこの葉蘭は実は美しい花の咲いていた駿河蘭だったことが後に判明いたしました。語る会の会員で土屋文明の弟子に当たる方が、直接文明に問い合わせたところ「いくら何でも病氣見舞に葉蘭など持っていけないよ」という返事で一件落着した次第です。

龍之介には鵠沼時代の作品に「悠々荘」という短編がありますが、そのモデルとなった「楽々荘」の跡を「確かこの辺りだと思うのよ」とおっしゃりながら、松が岡二丁目から三丁目界隈を訪ねて歩いたこともありました。

しかしお年を召すと共に、左登子さんは身体が思うように動かなくなったのでしょう、お訪ねすると、——訪ねるといっても門の外からお声をかけ、お買物の有無を尋ねたり、それらの品々をお届けしたりという程度でしたが——「ハーン、ちょっと待って下さい」という声が少しずつ小さくなってきた時少々不安を感じました。

そして門の所まで出て来られるまで時間がかかるようになり、出て来られた時の姿勢好にも「オヤ」と思うようになったのです。以前は大変和服がお似合でちゃんと身づくろいされていたのに、その元気も無くなられたのでしょうか、門の所まで出て来られるのがだんだん無理な状態になってしまいました。幸い地域の老人福祉キー・ステーションのような形になっておりました鵠生園が近くにあり、そのケースワーカーの方々、看護婦さんにも相談にのっていただきました。健康状態、お宅の事情などで特に冬場の生活は厳しいものがあり、老人ホームで少々のおんびりしていただきたく説得したのですが、何としても自宅に留まっていたいという意志が強く、周囲の方々の暖かな善意も仲々通じない時がありました。戦前から文筆家との交流も深く、同じ「語る会」の会員でもあった田中まさ子さんは、左登子さんと年齢が近い事もあって大変心配され、ご不自由な身体にもか

かわらず何度も説得に出向かれました。左登子さんの家を出たくないというお気持ちの中には、兄義敏さんと共に守ってきた龍之介関係の資料をそのままにしては外に出られない、ということもあったのではないかと思います。鶴生園の方々のご意見でも、年を経て来た方には自分の生き方を大切にして差し上げるのが最適だということで、それにはどうしたらよいか、「語る会」の例会の際も皆様方から「何とか力になれないだろうか」という気持ちが寄せられました。そういった方々の思いを受け、私共も動いたのですが、何といたってもお住いのことが一番案じられました。その補修等で経済面での補助が欲しかったところ、これ又、藤沢市文書館が配慮してくださって貴重な文献の保存のためサッシ戸を入れていただきホッとしました。ところが左登子さんの健康状態はますます悪くなり、腰の痛みを訴えて、腰が海老状に曲り歩行も出来なくなってしまったのです。

叔父の資料を
藤沢市に寄贈
葛巻左登子さん

龍之介の遺産埋もれず

もうこのままにしておくことは出来ない、と、またまた鶴生園に連絡をとりました。

早速看護婦さんがかけつけて下さり、血圧・心臓の状態が思わしくないため、湘南中央病院へ緊急入院という処置をとってくださいました。

(96年2月29日)

新資料の発見

その間お宅は無人状態となりますし、戸締り等も完全ではないので、皆さんと相談の上、そして左登子さんのご了解をいただいて、本類、書き物等一切を文書館の方にお預かりいただくことになっ

96年7月22日
朝日新聞 夕刊

96年12月29日
朝日新聞

めいぶに於て「龍之介」の
直筆雑誌など初公開
96年11月8日
朝日新聞

「葛巻文庫」誕生を報じる各紙紙面

たのです。どのような資料があるか皆目わかりませんでしたが、万一貴重な資料が散逸してはならないと「語る会」の会員や、御近所の方、そして文書館の職員の方々と段ボールにどんどん詰め、ひとまずお預けしました。

実はこの作業が大変でして、ちょっと書き留められないくらいなのですが、数日に亘り、本当に皆さん方お力を貸して下さいました。結果的にはそれらの中から大変貴重な資料の数々が見つかり、ここにも掲げた様に新聞にもとりあげられたり、文書館に展示されたりしたのです。「葛巻文庫と芥川龍之介資料」ということで多くの方々に関心を持っていただきました。

ただ当初は、そのような資料云々より何より、左登子さんが安心して身体を休めることが出来るように、と皆さんが願って、動かれたのです。地域の中の一人暮らしのお年寄りとどうかかわっていくか、が私共の気持ちであったのです。ご近所の方、「語る会」はサークルの仲間として、そして老人福祉のキー・ステーションである鵠生園、文書館の職員の方達の仕事を離れての優しい心遣いが、今日の日を迎えたのだと思います。左登子さんにとっては、これまで一生懸命守ってきた資料だけに、何としても家を離れたくない、という気持ちも、皆さんの誠意をもった対応に、心を開いて下さったのだと信じています。湘南中央病院から、清流苑、鵠生園とその都度入所先を配慮下さいました市の老人福祉担当の職員の方、本当に暖かな善意の風が鵠沼に吹きました。

葛巻左登子さんは現在、地元鵠沼の鵠生園で静かに暮らしておられます。皆様ありがとうございました

[芥川龍之介より葛巻義敏への書簡（抄）]

（岩波書店『芥川龍之介全集』第8巻）

この中にお金十圓ありこれにてルナアルの「葡萄園の何とか」と原稿用紙十とちとを買い、餘りたるお金にて足りない畫の具を買ふべし筆も入れれば買つてもよし

エライ叔父

二十三日朝
バカ甥さま

（大正13年）

コノ絵ハガキハオ前ニヤルノ故一番イヤナノヲ選ンダト知ルベシ。温泉
ハハイッター一日二日ハ興奮シテ夜ネラレナイ

三日位カラ湯ヅカレガ出テヘタヘタニナル又ソノ興奮トヘタヘタノ中間
ニイルツマリヘタ奮ダネ モウ本ヲ四冊ヨンデシマッタ 何モヨムモノガナ
クテ弱テイル

二伸 お前の寫した芭蕉の行状も送ってくれ 二階にあったと思ふ。
いろいろしたい事が出来た。

(大正14年 修善寺より)

バスケットの中の原稿、

風呂敷に包んだ原稿、

鼠色の舊小説、金元明の部（コレハ義チャンニ見テ貰イタシ）

(昭和元年 鵠沼より)



原稿を募集します

鵠沼の歴史にかかわる人、物、風俗、伝説、建築物など、すべてについての
原稿を募集します。

鵠沼を語る会会員以外の方の原稿も、大歓迎です。お知り合いの方にも声を
かけてください。

また口述による記録も行います。

当会編集委員会のメンバーが出向き、お話しをお聞きして原稿にまとめま
す。

どうか、ご連絡ください。

『鵠沼』編集委員会

大分賀来神社訪問記

高木 和男

(鵠沼を語る会会長)

1995年10月の下旬、大分で開かれた栄養改善学会に参加した機会に、大分市にある賀来（かく）神社について少し資料を集めてきたので、まとめてみた。

江の電鵠沼駅前の、小高いところにある賀来神社は、明治の初期（おそらく20年ごろか）不毛の砂地であった鵠沼海岸を住宅地として分譲する計画を企図した大給子爵（帝鑑の間詰の譜代大名。2万1千石。文化10年頃には松平姓を名乗る）が、かつての領地であった大分府内の郷社賀来神社を招聘、分社したもので、鵠沼に住まわれていた故木下利次さんは、「あれは父が大給さんに頼まれて招致の手続きをしたのだ」というていた。

木下利次さんは、大給家が大名だったころからのお抱え大工の棟梁木下利吉のご子息で、利吉は明治になってからは宮内省に関係していたらしい。

当時の大工棟梁は神主の資格を持つ人もあったらしく、古文書に出てくる「神人」に相当するものであろう。

賀来神社は旧大分郡賀来村にあった。いまは大分市に属して市役所から30分くらいで行けるところにある。

大分市史によれば賀来村は大坪村、中島村、桑原村、餅田村、市村、片面村の6郷に分かれていたという。正保（1640年頃）郷帳には田高921石、畑高165石となっているが、50年後の府内領郷帳には1144石となっている。米の産地であり領主としては大切な領地であったのであろう。

この大分川の水運を抑える格好で、大分川と賀来川の合流点近くに賀来神社が建てられている。

この神社は、3キロばかり北方の山頂にある柞原八幡神社（ゆずはら、由原とも書く）の摂社で、祭神は武内宿弥（善神王）と建岩立命であるという。

柞原八幡神社は格式が高く、830年に比叡山延暦寺の僧金亀和尚が宇佐八幡（豊前一宮）に千日の御籠もりゐして神託を得て建てたという古くからの豊後一宮であった。

743年に墾田の私有が許されるようになって、これを公田に対して荘園と称したが、9世紀は貴族、神社、寺院による荘園の開墾が盛んに行われた時であった。思うに柞原八幡神社はこの時代に造られたものであり、その摂社として設けられた賀来神社は、大分川の流域に開墾された水田の管理（年貢の取り立て）のために設けられたものであることは、明らかである。

そこへ祭神として柞原八幡神社は家臣である武内宿弥を赴任させたという形式であろう。

宿弥が老齢になったので、主上の柞原八幡神社が武内宿弥に「平時は賀来神社に住んで休養し、秋の11日間だけ柞原八幡神社に出仕せよ」と命じたのに、耳が遠くなっていた宿弥は聞き違えて、秋の11日間だけ賀来神社に来るようになったというおもしろい言い伝えがある。そのため9月1日から11日間がお祭りで、例年盛んな市が立って、境内が賑わうという。そして卯と酉の年すなわち6年ごとには、柞原八幡神社まで盛大な大名行列をするお祝いもある。

江戸時代になっても府内大名はこの習慣に便乗して、年貢の取り立てにこの神社を利用したのであろう。したがって神社としての格式は柞原八幡神社に及ばないが、府内大名大給家にとっては深く信仰する大切な神社であったのであろう。それで鵜沼に土地を開拓する時、ご先祖からの信仰の厚い賀来神社を鵜沼に招聘して、この地の氏神にしようと思ったのであろう。しかし、鵜沼の本村は、神格の上では数等高位にある伊勢神宮の荘園として発足したもので、古くから伊勢神宮を祭っていたのである。

鵜沼の地には稲荷神社もあり、いまのところ神様の群雄割拠の時代にある。どうなることか。

『鵜沼を語る会 活動の記録』(3
9ページ)にも記してありますが、
私ども「鵜沼を語る会」では、当面
の主要テーマの
一つとして「鵜
沼の歴史的家屋
の記録」に取り
組むことにいた

しました。世代の交代期を迎えて、別
荘地鵜沼を特徴付けた大正、昭和初
期の建築物、建造物も、急速にその
姿を消しつつあります。
時代の流れとしていたしかたない

こととは思いつつも、古きよき鵜沼
への哀惜は禁じえません。私どもは
せめて映像、図面などで記録に残し、

鵜沼の歴史とし
て留めたいと考
えた次第です。
これはと思わ
れる建築物、建

造物を当会までお知らせください。

また会員が写真撮影のためにお邪
魔したりお話を伺ったりするかと
思います。よろしくお願いいたします。

鵜沼の歴史的家屋 記録へのご協力を

葉山家の人々

若尾 肇

葉山 又兵衛（マタベさん）

堀川を語る場合、お隣だった葉山家の人々を除外することは出来ない。というのは、私が生まれてから、葉山家の人々とは親子三代に渡る付き合いが続いているからである。

私の父が海軍を止めて鵠沼に住み着くようになったのは大正十二年であった。父は園芸を始めるため、退職金で土地を探し、葉山さんの隣の土地約千坪を借りて、そこに温室と二十坪のささやかな家を見て、冬はスキートピー夏はトマトを栽培していた。初めは買い取るつもりだったが、当地の地主さんは頑として、

「貸すのなら百年でも二百年でもよいが、名義変更は困る。」
と言ったので、やむなく借地契約を結んだ。これが葉山又兵衛さんだったのだ。

彼は、若い頃苦労したのか、二宮金次郎ばりの勤勉家で、金が溜ると土地を買い広げ、一旦手に入れた土地に対する執着は大きく、大地主になったと聞いた。それ故、絶対に売らないという線は頑なに守っていたようだ。

私が生れたのは、大正十三年一月であったが、その前年の九月に関東大震災があった。我が家は、トタン屋根だったためと、大勝（だいかつ）という大工さんから、

「私は養子なので、女房に頭が上がらないから、第一回目に立派な仕事をして見返してやりたいから、是非やらせて下さい。」
と懇願され、手を掛けてくれたため、トタン屋根で全体が軽かったことも手伝って、少し傾いただけで倒壊は免れた。

堀川町内の人々は、又兵衛さんのことを通称『マタベさん』と呼んでおり、私がよちよち歩きの頃、母に連れられて葉山家に行くと、彼はいつも茶の間に居て、渋茶をすすっていたので、私の記憶からすれば、いつも苦虫を噛み潰したような顔に、茶渋が滲み出ているように見えた。

マタベさんには、マタちゃんこと長男又三郎、ナオちゃんこと次男直吉（なおよし）三男又春、長女八重子、次女シーちゃん、三女イネちゃん（この人は俵家

に嫁いで、俵・稲子になったが、偶然とはいえ姓名が誠に面白い取り合わせだなと子供心に思った）計六人の子持ちであった。

私が三才位の頃、マタベさんは私の隣の数千坪の敷地に豪邸を建てた。彼は子孫のために美田を残す方針だったようで、私の父母に語った彼の綿密な計算（両親から聞いた話）には驚かされた。

数十名の宴会ができる大きな家の屋根は、すべて銅葺きにして、道路沿いには百メートルほどの大きな玉石の垣を作り、敷地内には椎の木、もちの木、銀杏、まさき、猿すべり、やつで等無数の植木を植え、玄関の左手は、庭と母屋を隠すように築山を盛って、公園のようにし、その左側の小道を進むと、奥に稲荷神社があって入り口には、石作りの狐が二匹神社の番をしていた。この付近は鬱蒼と木が残っていて、昼でも薄暗く、子どもが一人で歩くのは気味が悪かった。屋敷の西側は、寒竹と背の低い木が数百本植えられ、しゃがむと頭上を覆うように葉が茂って子供たちの溜り場にもなった。マタベさんの計画では、将来金に困ったら、屋根の銅をトタンに買えて売るといくらになる、それで足りなかったら、植木を一本ずつ売ってもいくらになる、それでもだめなら、玉石を売れば何とか凌げるという遠大な考えだったようだ。

このお屋敷の上棟式（当時は『建て前』と言っていたが。これは家が完全に建つ前なので、そう呼んだのか）は豪勢であった。上棟式の餅投げは、『餅投げ』のところで述べたので省略する。葉山家と私の家は隣であったが、私の方が1メートル位低く、コンクリートで仕切られていたが、けやきの一枚板を渡して、頻繁に我が家との交流があった、

新築したマタベさんの家は、玄関の南隣にハイカラな洋館があり、蓄音機があった。この蓄音機でよく聞かされたのは（私が子供だったため）桃太郎音頭であった。

ドコデーエ、ウマレターア、モモターロサンハ、アリヤサ
ニホンーラインノオ、カタホートリヨー
オワリノイヌヤマ、イチリユキヤーア、
クリスノカワラノ、フルヤシキーイ、
サッテモドージャイナ、エンヤサ

この歌詞と曲は、どういう訳か私の頭にこびりついている。当時、爆発的に流行していた『波浮の港』のレコードもあったが、女学生だったマタちゃんの妹イネちゃんが、毎日のように歌っていた。

お屋敷内も広く、子供が『隠れんぼ』をするには、誠に楽しい造りで、至る所に隠れ場所があり、鬼になると探すのに骨が折れた。

畳敷きの広間は、夏は開け広げて涼しく、避暑に來た人たちが、蟬時雨の中で、『謡』の稽古等をしていた。

台所は広く、村の衆の宴会や集まりがあるときの炊き出し等も賄っていた。台所の隣の茶の間は、日当たりが悪くやや暗い感じであつたが、母と葉山家へ行くと、決まってこの茶の間でマタちゃんやイネちゃんやシーちゃん等と、お茶をすりながら話し込んでいたので、私には陰気くさくて嫌だつた。そこで私だけ、外の広い庭や、築山に上って遊んだり、植え込みに植えてあつた登り易い椎の木に登ったりして遊んでいた。

この椎の木は、たくさん実が成つたので、集めてきては貰ったものだが、火鉢で煎って食べると菓子類の少なかった時代なので、中々良いおやつになったものである。

稻荷さんには時々行つたが、回りに高い銀杏や杉等が茂っていて、昼でも薄暗く、何となく気味が悪くなって。後ろから幽霊が覆い被さつて來るような錯覚を覚え、早々に引き返した。（昭和三年前後）

葉山 又三郎（マタちゃん）

マタベさんが亡くなり、長男マタちゃんが後を継いだのは、彼が未だ十八才の時であつた。彼は多血質で野太い声の持ち主だつた。

彼は湘南中学に進学したが勉強家であつたようだ。母の言によれば、風呂炊きの最中にも、大きな声で英語のリーダーを暗唱する声が聞こえたそうだが、彼は赤木校長から『稀に見る勉強家』（当時の勉強家とは、今のような点取り虫ではなく、学問探求の意欲の強い者が多かつた）の折り紙を付けられて、静岡高校に進学した。

彼はまた正義感が強く、静岡高校でマルクス・レーニン主義に傾倒したようだが、それは一つは自分の父親が、大地主として今日まで歩んだ経緯を心の中で批判し、二つには当時の政府が『百姓は、生かさず殺さず』式の政治を取るのに強い義憤を持ったためと考えられる。

それ故彼の交際範囲は、土地の農家の人々が多く、彼等と車座になって酒を飲んだり、ワイ談を飛ばしたりして、インテリぶるところがなかつた。バクチ等で

警察に逮捕された村の若者等を進んで貰い下げるなど、面倒見の良い庶民性を備えていた。

そこで、お上意識が強くアカと言うと、悪魔のように思われる土地柄の中で「マタちゃんはアカだ」と言われながらも、彼を敬遠する地元の人は少なかった。

当時は畑越という巡査が、この地区の担当だったが、夜など私の家の植え込みに張り込んで、オルグの集会を監視し、時には「待て一つ」と叫びながら追い掛ける声を聞いたこともある。彼は何度か捕まって投獄され、言語に絶する拷問も受けたそうだ。陰茎を蠟燭の火で焼かれたとか、爪の間に竹べらを入れられたり、くるぶしを鉄の塊でしつこく叩かれたことを聞かされた。村の人々は「マタちゃんも早く転向すりゃあいいに」などと話し合っていたが、彼は最後まで説を曲げなかった。

彼は獄中で、東京女子大出身のフユさんと知り合い結婚したと聞いたが確かではない。フユさんは彼の人柄にすっかり惚れ込んで、「結婚してくれなければ江の島の海に飛び込んで死ぬ」とまで言ったそうである。

彼とフユさんとの馴れ初めや両親の家柄、彼等の生い立ち、その後の活動等は、彼の友人高木和男氏の『踏み拓いた登り坂』に正確に詳述されているので、ここでは、考証的なことは省き、私が直接彼等に触れた両者の人柄や業績についてのみ述べることにする。

彼の結婚式は『さくら音頭』が流行った頃であり、マタちゃんの弟の『ナオちゃん』が酒に酔って眉と眉の間にしわを寄せ、

「サイタ、サイタサイタ、パットサイタ」

と苦しそうな顔で歌い、時々山羊の泣き声を真似て「メー、エエエ・・・」と言っていたのが、妙に印象に残っている。

当時のしきたりで、花嫁のフユさんが町内の挨拶回りに、我が家にも見えた時、一般の花嫁は日本髪に花嫁衣裳が普通であったが、彼女の場合、普通の訪問着で、髪も洋髪に白く丸いリボン様のものを付けていたのが印象的であった。

マタちゃんは、剛腹な反面、稚気満々な一面があった。あるとき一頭のシェパードを飼って『阿蘇』と名付けたが、私に、

「ハジメちゃん、この犬を仕込んでよう、『襲撃っ』と命令すると『うー、わおん』　　といって飛び掛かるようにするんだ」

と真顔で言ったので、そんな事されちゃたらんと、菓子をやったりして、なつかせようとしたものだ。また、いきなり私を抱きあげて、脇の下や足の裏を思い

切りくすぐり、私が「ギャー、ハハハ・・・」ともがくと、喜んでいると思うのか、ますます強くくすぐる。これで何度か死ぬ思いをした。また、ある時、

「ハジメちゃん、俺は忍術を使えるぞ。」

「嘘だい。じゃあやってみな。」

「じゃ、この部屋を出てな。」

「目の前でやってくれなきゃあ。」

「精神統一出来ねえから、外で待ってな。『いい』って言ったら入ってきな。」暫く待たされて「いいよ」という声が聞こえたので、部屋に入ってみると、居ない。てっきり押し入れの中だと思い、押し入れの中を探してみたが居ない。

そのうち彼は障子を開け、左手で右手の人差し指を握り、左手の人差し指は上に上げた形でよろけながら入ってくる。

「ちゃんと消えたんべ。これはきつーい修行が要るんで、うーんと疲れんだよ。」

何のことはない、私たちが押し入れを調べると思い、隣の部屋から廊下伝いに反対側に逃げていたのだ。

私もこんなことを真似て、よく子供と遊んだ。私が現在持っている稚気は、多分にこのマタちゃんの影響を譲り受けたものと思う。

アウト鬼

マタちゃん、フユさんと一緒に子供達がよく遊んだのは、アウト鬼であった。私が小学校五～六年生の頃、近所の子供達が七～八名葉山家に集まってくる。誰からともなく、

「アウト鬼やんべえよう」と言い出すと

「おう、やんべえ、やんべえ」と言っ、マタちゃんやフユさんと呼んでくる。

ジャンケンで負けた鬼が百数えている間に隠れるのだが、百の数えかたに「ノギサンハ、エライヒト」または「ダルマサンガ、コロンダ」と言うと、十数えたことになるので、皆それを使ったが、フユさんだけは「ヒフミヨイムナヤコノトオ」と数えていた。

マタちゃんは、着物に下駄履きのままで、ドタドタと地響きを立てながら隠れるので、どこへ逃げたかすぐ分かってしまう。

鬼が探し始めると、彼はわざと大声で、

「ウオーッ、オレオレオレ、オーレ」

「オエーッ、エロエロエロ」

と言ったりしては、鬼が近付くと地響きを立てて逃げる。鬼が「マタちゃん、見付けた。」と言ってもお構い無しに逃げる。

「マタちゃん、見付かったのに、逃げちゃズリーヤ、ズリーヤ。」（狡い）と喚いても、お構いなしにどたどたと地響きを立てて逃げ回るが、やがて野太い声で、

「うわーっ、はっはっはっはあ」

と笑いながら姿を現す。

フユさんは、見付かってしまうと素直に出てきて、口に手を当て、

「アウトを頼むよ！」

と独特のアルトで、隠れている者に呼び掛ける。この二通りの声は、私の楽しかった思い出の一つとして、未だに昨日のことのよう私の耳に残っている。

「わりとウメエヤ」

またちゃんは、お茶が好きだったようだ。いや茶を飲みながら駄弁るのが好きだった。

「若尾さんのとこの茶はうめえから、ちょっと行って飲んでくる。」（フユさん談）

と言っては、よく我が家に駄弁りにきた。殆ど父や母との政治談義が多かったようだが、主義を振り回すことはしなかった。そして出された煎餅等をぼりぼり噛みながら、

「うん、この煎餅はわりとウメエヤ。」

と言うのが口癖であった。そこで我が家では彼が下りて来る姿が見えると

「ほら、『わりとウメエヤ』が来た。」

と言って、湯を沸かすことにしていた。葉山家は来客が多かったので番茶が多く、我が家のあまり上等でなかった煎茶でもおいしかったのであろう。

二・二六事件の時は、我が家に駆け付け、興奮しながら非常な関心を示していたが、農民の苦勞を知り、人一倍愛国心の強かった彼は、決起した青年士官たちの、心情に共鳴するものが多々あったと思う。

「わりとウメエヤ。」

と言うのも忘れて談義に耽っていた。

マタちゃんは、『アカ』と言われていたにも拘らず、二十八才で藤沢市議に立候補し、最高点で当選した。彼の政治に掛けた情熱はすさまじく、当選後、フユさんに、

「俺がこんな若さで当選できたのは、どうせ短命に決まっている。だから思い切り大仕事をしてやるんだ」

と言ったそうである。

彼はその言葉に忠実に、議会ではかなり強い発言もしていたようだ。例えば、市長が曖昧な答弁をすると、さっと立ち上がり、

「市長っ、今直ちに止めたまえっ。」

と怒鳴ったりしたそうだ。（フユさん談）

戦後、彼が藤沢市長に立候補したとき、知人や地元の人々は、

「マタちゃんは、無所属で立ちやあ、当選確実なのによ。」

と噂し合っていたが、彼は彼なりの信念を通して、無所属にはならず、押し通した。息子の峻ちゃんに夢を託したか、小学生の彼を連れ歩き、辻説法を繰り返していた。

彼の施政方針演説は、戦後の苦しい庶民生活に向けられ、利益誘導型は取らず、

「公益質屋の開設、下水道の整備」等の地味な政策を強く打ち出していたため、利益誘導主体の保守系候補の前に、敗戦の憂き目を見ることになった。

彼の辻説法が終わると、（現市長〔当時〕）の峻ちゃんが、小学生独特の黄色いソプラノで、

「藤沢市長には、庶民のための政治家、葉山又三郎、情熱の政治家、葉山又三郎を、是非とも宜しくお願い致しまーす。」

と声を張り上げていたのが思い出される。

彼は共産党内では国際派に属し、主流派と対立していたようだが、血の気の多かった彼は、党内の議論でも幹部にかなり強い発言をしたようで、ついに除名の憂き目を見た。共産党長老の話によれば、彼は党内の討論ではかなり過激に激論を交わし、激昂して、

「そんな共産党なら、止めてやるっ。」

と言い、売り言葉に買い言葉で除名になったそうである。

同じように除名されても、元副委員長の袴田などと全く違っていった点は、部外者には除名の弁解は一切せず、共産党の悪口も一言も言わなかったことである。こ

の点は彼らしい潔さと思った。

彼は、非常に義理堅い面があった。私の家は、マタベさんと、

「周囲六尺幅は、植えてある樹木はそのまま保管して欲しい。その代わり、地代は取らないから。」

との契約があった。いかにもマタベさんらしい発想で、周囲の木とは、けやき、椎の木、珊瑚樹、松ノ木であったが、土地を貸す時も子供達の後々のことを考えていたようで、常人にはなかなか頭の回らぬことである。彼はマタちゃんを政治家にしたかったらしく、時の代議士の作田高太郎氏の下に、何度も連れて行ったようだが、思想面では父に逆行した。（高木和男氏「踏み拓いた登り坂」より）

それはさておき、前期土地の賃貸契約の解釈が取り違えられ、周囲六尺は貸していないと思われて、隣家が自分の庭に隣接する部分を坪十五円で売って欲しいと申し出た。当時フユさんは坪十五円ならと、マタちゃんの留守中に承諾した。そこは私の家の門に掛かるので慌てて、売るならこちらに同値段で売って欲しいと願い出た。マタちゃんは、これを聞いて烈火の如く怒り、

「なんでそんな勝手な約束をしたか。若尾さんに申し訳が立たん、」と恋女房のフユさんを大声で怒鳴り付け、顔の腫れ上がるほど殴った。回りの者は、はらはらしながら見ているしかなかった。

「あんなにしなくてもいいのに。」

と少なからず同情したものだが、彼は筋を通さぬことは許さない潔癖さを持っていた。

彼は予言通り市政壇上に倒れた。市長の不正事件を追及中、市長の曖昧な答弁に、満面朱を注いで立ち上がり、更に追及しようとして、崩折れるように倒れ、そのまま不帰の人になってしまった。（傍聴者談）

葉山冬子（フユさん）

フユさんは、直情径行に見えた一面、人なつっこい寂しがりやでもあった。それだけにたまに感情的になると、目を吊り上げて、ヒステリックに怒鳴りつける事もあった。

ある夏の日に、葉山家で海水浴に行くことになり私も誘われたが、母から

「用事があるから、今日は止めにして、また今度にしなさい。」と言われて断念した。夕方、母が彼女を訪ねると入浴中だったが、母の声が聞こ

えると素っ裸のまま飛び出して来て、タオルで前を隠しながら、物凄い剣幕で、
「どうしてハジメさんを寄越さなかったのよ。どうしてなのよ。そんなふうに過保護にしているのっ！」

母はただ目をぱちくりさせるだけであった。

平素、何かと心に懸けていた私が来なかったので、頭に來たらしい。そんな一面もあったが、当時の鵠沼は、小さな事をこせこせあげつらう傾向のある中では、彼女は小さな事に拘らぬ鷹揚さも持ち合わせていた。

彼女もよく私の家に駄弁りに來た。ある時コップにベージュ色をしたクリームを入れて持ってきて、

「ハジメさん、クリームを作ったんだけど良かったら食べない？」

と言って差し出した。私はクリームは大好きだったので、嬉しくなって、

「頂きまーす。」

と言って平らげたが、うどん粉をこねたような味で、お世辞にもうまくなかった。

「おいしかった？」

と彼女から聞かれたので、

「おいしかったです。」と答えたら、母を見てくすくす笑い、

「これ峻坊に作ったんだけど、一口食べたっきり食べようとしないので、『食べたくないの？』って聞いたら、にやっとして、『後で頂きまーす』なんて言うのよ。」

と言って舌を出した。母は、

「自分の子供の食べないものを食べさせるなんて、ひどい！」

と後で憤慨していたが、私は

「気にしない、気にしない。」

と言ってごまかした。恐らく失敗作だったのだろう。日中戦争が始まって物資が欠乏し始めた時なので、捨ててしまうのは勿体ないという風潮に副ったものと解釈した。

マタベさんが計算ずくで残した大きな遺産は、マタちゃんとフユさんで政治に使い尽くしたようだ。母が知り合いの海苔屋さんから

「お宅の千坪の土地は、借地権があるから時価の三～四割で買えますよ。私が金を出しますから、買っておきなさいよ。それで一緒に儲けましょうよ。」

と持ち掛けられたが、当時、葉山家は遺産を切り売りし、台所も苦しかったようなので、

「親しく付き合ってきた人の足下に着け込んで儲けるなんて、とても出来ない。」

と断わり、無条件で借地の半分を返すことにした。フユさんは、

「お宅の土地は、梯次郎さん（父）にいつまでも使ってもらおうと思っていたのに。」

と言ってくれたが、まだ財政難のようだったので、我が家の周囲百八十五坪を残して、買い手を付けて返した後、残った百八十五坪も借金して時価で買い上げた。すると税務署が、

「当節無条件で借地を返す等、常識的にはあり得ない。約千坪だと借地権に換算すると〇〇万円になるから、無償返還したことは借地権の贈与と見做さざるを得ない。その分贈与税を払え。」

と言ってきて、大いに憤慨したが、我が家も経済的な余裕は全くなく、必死に交渉して事なきをえた。

ともあれ、マタちゃんもフユさんも、子供達とはよく遊んだ。前記『アウト鬼』などは広い邸内の縁の下に隠れたり、太い木に登ったり、大人と子供との触れ合いの場に恵まれたことは幸せであった。その点今の子供達は縦のつながりが薄いのが気の毒である。

フユさんは、マタちゃん亡き後、夫の遺志を継いで立候補し、見事当選したが、不幸にも病に倒れて、間も無く帰らぬ人となった。

葉山 峻（シュンちゃん）

マタちゃんが、結婚して間も無く、男の子が誕生した（昭和八年五月一日）。マタちゃんは大層喜んで『峻』と名付け、十三畳の大風呂を揚げたのは前述の通りである。

母は峻ちゃんを誰よりも可愛がり、よく彼を抱きに行っては、帰ってくるとその模様をこまごまと、父や私に聞かせていた。

私も彼の首が据わってくる頃は時々抱っこしたもののだが、彼は特に『高い高い』と言って、高く差し上げられるのが大好きだった。

ある日、彼に近付くと、顔を赤くして手足を激しく動かした。『高い高い』をしてもらいたいのだなと思って、彼を抱き上げ、

「ほら、タカイ、タカーイ」

と言いながらサービスに上に放り上げるようにしたら、彼は「きゃっ、きゃっ」と声を出して喜んだ。ここまでは良かったのだが、そのうち、私の頭上から、生温かい雨を降らせた。たまたま、おむつがなかったのだ。彼の小便を頭から浴びたのは、恐らく私だけであろう。母や私が彼の乳母車に近付くと、

「アッククーン、アッククーン」

と言いながら手足をばたつかせて、その度に抱いてくれとせがんだ。

彼がよちよち歩きだった頃、私の祖母が亡くなった。告別式を終えて、柩を霊柩車に移した時、彼は霊柩車に乗るんだと言って聞かない。マタちゃんが、

「あれには乗れないんだよ」

と言っても聞かばこそ、どうしても乗るんだと駄々をこねていた。マタちゃんも遂にさじを投げて、彼を抱っこして私達と一緒に霊柩車に乗り込んだが、この時はマタちゃんの子煩悩な親馬鹿ぶりを見せていた。

峻ちゃんの子供の頃は、かなりやんちゃな方であった。稲荷講や凧揚げの後には、村の衆は葉山家に集まり、無礼講の酒盛りが始まるが、酒が回ってくると、かなりどぎつい卑猥な言葉も飛び出す。子供達も集まってげらげら笑いながら聞いている。今の教育ママが見たら眉をしかめる光景もあったが、当時は皆あつけらかんとして拘る者も居なかった。

田舎芸者を数名呼んだことがある。酔った小父さんたちが、悪乗りして芸者の裾を捲った。芸者は慣れたもので自分から前を捲り、小父さんたちの目の前に行って「見えたか、見えたか」と言っていた。

これを見た峻ちゃんは、これがすっかり気に入って、ズボンの前を開けて『チンポコ』を出したまま、

「見えたか、見えたか。」

と言いながら、逃げる者を追い掛けていたことがある。フユさんが苦笑していた。

彼が小学生の時、私は中学の高学年であったが、兄弟のなかった私は、『俗物良寛』気取りで近所の子供達と遊ぶのが好きだった。

マゴちゃんとのシゲルちゃん、大工の金作さんちのセージ（清二）ちゃん、竹内さんの双子の兄弟シッちゃん（七郎）とハッちゃん（八郎）、それに現市長（当時）のシュンちゃん等遊び相手には事欠かなかった。

彼等の何人かは、私の姿を見ると金魚のうんこよろしく、ぞろぞろ付いてくる。

「アウト鬼しんべえよう。」

誰かが催促すると、みんな同調して、

「やんべ、やんべえ。」

となる。鬼になった者が数えている間、私が急いで隠れようとする、みんなぞろぞろ私に付いてくる。これではすぐ見付かるので、

「こっちい来ちゃあ駄目だったらあ。」

といって追い払っても、三～四名は必ず付いてくる。

そのうち、鬼が数え終わって探し始める。私はマタちゃんの声色を真似て、

「おわおわおわ。げーろ、げろ、げろ」

等と野太い声を出すと、皆げらげら笑う。鬼が急いで近寄ろうとすると、さっと逃げたいのだが、足手まといが多すぎて見付かってしまう。初めに見付かった者が鬼になり、もう一度繰り返す。今から思えば、よく飽きずに続けたものだと思う。

「アウト鬼は、このくらいにしとくべえ。今度は何がいいか？」

シュンちゃんは怪談が好きだったようだ。彼を初めとして、七、八名の子供達が、

「おっかねえ話してくれよう。」

とせがむ。私は餓鬼大将よろしく、彼等を連れて西側の植え込みに入り、語り始める。

「・・・海の底に潜って行くと、青白く光る岩陰がある。そーっと近付くと、そこは洞窟になっていて、奥の方に誰やら人影が見える。殺された息子モンスターの母親らしい。人の気配に彼女はこちらを振り向き、

・ ・ うわーっ、出 たあ〜っ！」

と大声で叫んで植え込みの中を駆け出すと、

「うわーん」

と泣きながら、後に付いて逃げる。怖いのに性懲りもなく話をせがむ子供達であった。

昭和三十一年、フユさんを失い、残された兄弟は大学生のシュンちゃん（二十三才）を筆頭に、ミッシャン（水樹）ナツちゃん（夏樹）ヨウシちゃん（洋四郎）と末っ子のヨーコちゃん（陽子）の五人は、障害者の伯母シーちゃんを抱え、生活費の他、多額の学費もあって、大変な重荷を背負うことになる。

彼等にとって幸せであったのは、叔父ナオちゃんの嫁ヨネコさんの存在であった。

彼女は、痩せた細い体であったが、屈託のない性格で実に面倒見がよく、まめ

に皆の世話をした。はたで見えて、よく体が続くなと感心させられた。そこで物要りの最も多い苦しい時期に、明るい雰囲気壊さずに、両親のないハンデを克服できたのは、彼女の陰の力に負うところもあったであろう。

彼は、フユさん亡き後、両親の遺志を継いで弱冠二十五才で藤沢市議に立候補した。堀川町内の衆は挙って手弁当で応援し、私も彼の車に乗ってぶちまかった。彼の、

「市政壇上に倒れた、亡き父、亡き母の遺志を継いで立候補致しました。」

「今、窓外には爽やかな緑の風が吹いています。市政に新風を拭きこみましょう。」

「待ち合い政治を廃止、市民による市民のための政治に致しましょう。」

という第一声は、具体的な政策には欠けていたが、センチメンタリズムの強い国民性に強くアピールし、高得票で全国最年少の当選となり、マスコミにも大きく取り上げられた。

彼は大学生の頃は、父譲りの社会主義を熱烈に信奉し、末っ子のヨーコちゃんにも立ち話で講義していたこともあったが、一般の人々には強制しなかった。

序に、兄弟のことに触れておこう。次男のミッシェンは、子供の頃はおとなしく地味な性格で園芸に興味を持ち、よく父のところに園芸の話を聞きに来たりしていた。大学に行ってから法律を勉強して、弁護士を志したが、シュンちゃんの女房役としてよく兄を助けていた。ネアカの叔母と兄弟の屈託のなさが、誰でも気軽に入っていける雰囲気を醸し出し、邸内には明るい笑顔が絶えなかった。私もよく遊びにいった、ふざけたY談もしたものだが、ミッシェンは中々の策士で、私が行くときにやにや笑いながら、

「何か面白い話は、ありませんか。」

とカマを掛けてくる。私はよく乗せられて、話し始めると、げらげら笑いながら喜んで聞いている。畜生！また乗せられたか、と思っても憎めぬ思いで帰ったことは、一度や二度ではない。

ナツちゃんは、茶目気はあっても人前では余り態度に出さず、おとなしかった。ミッシェンと同じく若い頃は園芸に興味を持ち、父の果樹の栽培等には関心があつたようで、時々父と話し込んでいた。

ヨーシちゃんは、ヤンチャ型で茶目気が多く、私が高校で数学を教えていた頃、バイクで帰ろうとすると、

「先生、先生。」

と呼び止める。何事かと思って振り返ると、

「車が回ってますよ。」

という具合であった。

ヨーコちゃんは、五人目にやっと出来た女の子だったので、フユさんにとっては、可愛くてしょうがなかったのであろう。

彼女が小学生の頃は、戦後のお仕着せ民主主義をどう学校教育に生かすかで、先生も戸惑っていたようだが、民主化教育の一環として、時々弁論大会を開き、それにいろいろな賞を出していたが、ある時フユさんが私に家にやって来て、母に、

「ヨーコったらねえ、弁論大会で野次賞を取ったのよ、演説のまっ最中に『お星様がとってもきれい』って言ったのが野次賞になったんですって。」

と目を細めて話していた。

このような兄弟たちが、最も金の掛る頃に両親を失い、経済的困難を乗り越えてきたのは立派であった。シュンちゃんが初めて市議に当選し、祝勝会の冒頭に、

「お蔭様で当選させて頂きましたが、両親を失ってから、陰になり日向になり、私を支えてくれたのは、弟の水樹でした。この席をお借りして、水樹に心から有り難うと言わせて頂きます。」

と彼らしくもなく、声を詰まらせて言った言葉が、居合せた人々の心を打った。

幼い頃を思い起こす度に、自然に恵まれた生活環境の大切さを、改めて痛感する。

著者の若尾肇さんは大正13年鵠沼に生れ、鵠沼小学校、
湘南中学校から海軍兵学校に進まれました。氏の文章は
「鵠沼」66号と67号に『鵠沼の思い出』と題して掲載
されました。今回は鵠沼在住時に特に親交の深かった「葉
山家」の方々の思い出を綴られました。

松岡静雄先生が海軍をやめられた事情について

高 木 和 男
「鶴沼を語る会」会長

松岡静雄先生は播州の産と聞いています。ご母堂が秀才で当時の和算の学者であつたそうです。井上通泰、柳田国男、松岡映丘はご兄弟です。静雄先生は海軍兵学校に入って海軍将校になり、千代田艦に乗船しましたが、部下の兵隊を掌握する才能に恵まれ、当時資質の低くかつた水兵などの気持ちをよく掌握して、習慣となつていたバクチなどもしないようにしたと伝えられています。その後これらの水兵は先生に心服するようになり、千代田艦が旅順港外で水雷に接触して沈没に瀕したとき、これらの水兵の決死の努力で沈没せずに帰港できたといわれています。当時、触雷して沈没しなかったということは、奇跡に近いことであつたそうです。

先生が戦争は決してしてはいけないと肝に銘じたのは、次のことによると話されました。日本海海戦の第1日が終わって夜のとばりが下りると、駆逐艦による水雷攻撃の出番になります。千代田艦は北へ逃げた敵を追って闇の中を北上します。行く手には多数の敵の水兵が浮いて救いを求めていました、艦に乗り組んでおられた宮様（東伏見宮ではなかったかと思います）は、先生に救ってやれと仰った、しかし先生は、艦の使命は敵戦艦の攻撃にあるということを考えて宮様を説得して、情報をとるために1名の水兵を救っただけで、漂う敵水兵をスクリーンで攪拌して北上したということでした。「このときの辛さを再び人に経験させてはいけない、戦争は決してすべきものではない」と話されました。先生のこの考えは戦争前のあの軍国主義の中でも主張されていきました。このときの戦争の悲惨さは、当時戦艦オリョールに一水兵として乗り組み日本海軍の捕虜となつたノウィコフ・プリボイによって一冊の本にまとめられています。（この本は戦前日本でも翻訳して出版されましたが、戦後『ツシマーバルチック艦隊の壊滅』として再刊されています。）

第一次大戦には軍艦筑波の副長としてドイツ領南洋諸島を占領しましたが、この時の様子は軍事占領の常識とは大分違つていたらしいのです。島々に副官を派遣して人情風俗を詳しく調べて将来領有後の資料を作りました。これなどは実兄柳田国男の影響を受けたと考えられますが、一般の軍人とは異なる桁外れに貴重

な資料を得たわけです。この成果は後に『ミクロネシア民族誌』（1927、岡書院）として公刊されますが、私なども『調理科学』をまとめるとき＜蒸す＞調理法が＜煮る＞調理法よりも先行していたことを言い切る根拠を得ました。

そして大正7年（1918）12月、願いに依り海軍をやめることになりました。『ミクロネシア民族誌』（1943、岩波書店より再刊）の初子夫人の後書きによれば、このとき先生は父上の墓前に日が暮れるまで参るなどして、ついに意を決して同志一名と共に海軍をやめることになったといえます。この原因は、海軍の統帥権を内閣に帰属せしめないと将来国を誤るであろうという「建白書」を提出して容れられなかったからだということです。同志一名については私は名は知りませんが、ご子息磐木さんは知っておられました。

このような事は当時の日本人は誰も思いつかないことでした。先生の見解の明には心から尊敬を払わねばなりません。先生の国文学者としての業績が目立ちそれだけが取り上げられていますが、それは先生のごく一部にすぎません。先生の偉さの基本は、日本の統帥権の在り方に含まれていた危険を早くから気付いておられた事にあると考えます。

先生が＜統帥権＞の在り方について海軍当局と意見が合わずやめられたということについては、口伝てには伝えられていますが、その上申書も無くそれを証明するものも現在のところ出てきていません。またこの事を文書に書いたものも少ないのです。私が現在知っている限りでは次のものなどです。

私はかつて先生のご息女野口喜久子さんの編纂された『砂のいろ』（1976刊）に寄稿を求められたさい、私が直接先生から伺った話として「大正の何年かに軍の統帥権を内閣に移さねば国を誤るといふ建白書を提出して、俺は首になったのだ、といわれた」（p215）と書きましたが、この文章を磐木さんが『ひよどりの風の海』（1990）に引用しておられます。息子の磐木さんすらはつきりとは知っていなかったらしいのです。

毎日新聞の海軍報道班員であった新名丈夫（この人は、竹槍では勝てない飛行機を増産しろ、という記事を書いて東条の忌諱に触れ前線にとばされた）は、戦後ある雑誌に松岡静雄先生の略歴を紹介してその末尾に「日本海軍にこのような大学者がいた。それだけではない、松岡が海軍をやめた真相を知る必要がある。かれは統帥権というものを軍部の手から離して内閣にわたさねばならぬと主張し、それを論じた建白書を提出した。そして上司と衝突して、嫌になって飛び出したのである。大正年間の事である。彼はこの事を公言していた。軍部から統帥

権を取り上げねば、いまにその崇りを国民が受けることになる」と警告し続けてきたのである。海軍にそのような人がいたのである。」と書いていると友人から聞いたことがあります、その誌名は失念しました。

私の友人若尾肇はその著『湘南の雲の下で』（私家版）で松岡先生の事を書いています。若尾さんのご両親は先生が古語学の講義を続けておられるとき、ともに講義に参加して深く先生に傾倒しておられた方たちでした。肇さんはこのご両親から聞いて先生のことを知っていたのです。肇さんはこの中で「かれはオーストリア大使館付武官となって現地に赴任したとき、彼の積極性が災いしてつっぱしり過ぎ、また後年＜統帥権＞を軍部が握っているのはけしからん、すべからく内閣に返上すべきであるとの持論を曲げず、建白書をだしたりして上司と衝突する事もあり、左遷される身となった。俺を左遷するような海軍なら辞めてやる、といって海軍大将になれる器であったのに海軍を辞職してしまった。」と書いています。

日本陸軍の不祥事ともいえる2・26事件のとき松岡邸には訪問客が跡を絶たずに続きました。小田急の鵠沼海岸駅から松岡邸まで人の行列ができたのです。

いずれにしろ松岡先生は単なる国文学者ではない。かれの意見を支持する人が多かったら先程の戦争はなかったろうし、沖縄問題も厚木基地の騒音も無かったであろうという大きな人物であったのです。鵠沼海岸は松岡静雄先生の人物を改めて見直さなければならないと同時に、このような大人物が鵠沼海岸に住んでいたことを誇りにしなければならないと思います。

「後記」これは私が直接先生から伺ったお話を補足する意味でいろいろな方のお話を総合しました。（高木）

鳩沼を語る会 活動の記録

(平成9年4月～9月)

【第11回総会】

第11回総会は平成9年5月13日午前10時から開かれた。出席者は次の18人である。司会は吉田が担当した。

有田裕一、稲葉元成、川上恵久、川島孝子、佐藤和子、関根久男、高木和男、高三啓輔、鈴木武夫、鈴木三男吉、竹縄芳隆、寺田良夫、永井久子、西 忠保、林 三郎、榛葉昭市、松岡 喬、吉田興一

(会員総数28人。出席率64%)

主な決議事項

◆平成8年度会計決算について

収入	254,069円
支出	63,805円
次年度繰り越し	190,264円

監査担当役員から正確、適正との監査報告があり、議案通り承認された。

◆平成9年度会計予算について

収入	271,264円
会 費	81,000円
前年度繰り越し	190,264円
支出	271,264円
事業費	63,000円
予備費など	208,264円

議案通り承認された。

◆平成9年度事業計画について

- ア 鳩沼在住の識者、古老を招き、市民を交えた講演会などを行う。
- イ 鳩沼村の成立と農漁村の生業の発展を調べる。
- ウ 会誌「鳩沼」の市内三図書館への寄贈は続け、さらに読者層の拡大に努める。
- エ 会誌「鳩沼」の合本事業の継続。検討委員会で引き続き検討する。

◆平成9年度役員人事および担当について

新役員は次の通り決まった。

会長 高木 和男 会長代行 関根 久雄

副会長 ※川上 恵久(総務・会計担当)

副会長 ※榛葉 昭市(企画・会誌編集担当)

各担当

総務(運営・記録)----- ※稲葉元成、林 三郎、川島禎一
(他サークルとの連絡、--- ※佐藤和子、永井久子、川島孝子、
公民館関係業務) 竹縄芳隆

会計 ----- ※西 忠保、三上重孝

企画 ----- ※吉田興一、※有田裕一、西 忠保、鈴木武夫、
与安 功

編集 ----- ※鈴木三男吉、有田裕一、※高三啓輔、※野
口ゆくえ、※松岡 喬

監査 ----- ※寺田良夫

合本事業継続検討委員会 ----- ※印が検討委員。
(会長直属機関)

(吉田記)

定例会報告

【6月例会】(6月10日)

(1) 企画担当吉田氏より、

- イ 今年度の史跡見学会を、茅ヶ崎市の文化資料館および平塚市立博物館見学にしたいと提案あり、了解された。期日は7月15日とし、詳細は7月の例会で発表することになる。
- ロ 今年度の公民館祭りの展示について、鶴沼の今昔を記録した写真を展示、その移り変わりを紹介したいと提案あり、了解された。
- (2) 会誌『鶴沼』編集担当鈴木氏より、編集委員会の討議の結果として以下の報告、要望があり、了解された。
 - イ 会誌『鶴沼』は毎年2回、3月と9月に発行したい。
 - ロ 若尾氏、田辺氏（いずれも非会員）からの投稿原稿が、長期間預かりっ放しになっている。早急に掲載の方向で処置したい。
 - ハ 9月発行の『鶴沼』に、高三氏の「東屋の歴史」、佐藤、野口両氏の「芥川龍之介資料展開催まで」を掲載したい。
 - ニ 会誌『鶴沼』に会の活動記録を掲載したい。その原稿執筆を総務担当に継続的に分担してもらいたい。
- (3) 公民館関係担当佐藤氏より、以下の報告があり了解された。
 - イ 湘南学園から、同学園中学二年生に鶴沼についての話をしてほしいとの依頼が鶴沼公民館を通じてあり、5月20日、佐藤、有田両氏が早速これに応じた。
 - ロ 公民館主催「鶴沼のつどい」で、環境問題に熱心なボランティアグループ「探求クラブ」から、当会も協力してくれと依頼された。
- (4) その他
 - イ 「鶴沼松が岡公園」の土地を寄贈された歴史学者故村川堅太郎氏の息女村川夏子さんが、公園になるまでのいきさつ、周辺の環境などについて話してもよいという意向をお持ちであることを、野口氏が有田氏に伝え、有田氏から会に報告された。会員だけでなく一般の参加も認めた公開講座にする方向で、次回例会で具体的にまとめることになった。
 - ロ 合本1号について吉田氏から報告。
 - 文書館石井氏から、合本1号の発行部数は最終的に73冊（1冊150円）になったとの連絡があった。残部数はすべて有田氏が保管している。その配布については、次回例会で決める。
 - また、合本2号以降については、あらためて検討することにする。
 - ハ 高三氏の東屋についての著作出版記念講演も今年中に一般の人も含めて行ってもらいたいと要望する。
 - ニ 六浦美智子さん、新たに入会される。

(川上記)

【7月例会】(7月8日)

- (1) 企画担当吉田氏より、公民館祭りの参加申し込み締め切りは7月29日との報告があった。先月の例会で決めた「鶴沼の今昔を記録した写真を展示する」という企画を確認、祭り企画担当者をきめ作業を進めることになった。
- (2) 会誌『鶴沼』編集担当鈴木氏より、以下の報告があった。
 - イ 会で預かっていた田辺氏の原稿について、一部書き直した上での再出稿をお願いしたところ、ご本人の不興を買い、原稿は取り下げるということになった。原稿をいただいてから相当の時間経っており、そのうえでの書き直し要請であり、ご不興も当然のことと思われた。今後は投稿原稿に対しては、さらに誠意をもって対処したい。なお田辺氏からは協賛金をいただいていたが、それもお返しした。また仲に立たれた逸見氏にも原稿を長く預かった非礼を詫び、ご理解を求めた。
 - ロ 若尾氏の原稿は、『鶴沼』9月号で採用することに決定した。
- (3) 野口氏から、鶴沼の編年史を作りたいとの提案があった。鶴沼編年史は昭和51年までのものはすでに会誌『鶴沼 第15号』（昭和58年7月）に発表されている。それ以降のものをという提案であり、了解された。

- (4) 6月の例会で決定し、7月15日に予定されていた茅ヶ崎市の文化資料館および平塚市立博物館見学会は、9月か10月に延期された。
- (5) 「鵜沼松が岡公園」の土地を寄贈された歴史学者故村川堅太郎氏の息女村川夏子さんの公開講座は、9月例会（9月9日）の日に行うことに決まった。
例会の開始時間を30分繰り上げて9時30分からとし、公開講座を10時30分から正午までとすることになった。会員以外の参加を呼びかけることになった。

（高木記）

【8月例会】（8月12日）

- (1) 公民館関係担当永井氏より、平成9年の公民館祭りは10月25日、26日開催と決定したことが報告された。吉田氏が展示手続きを行い、展示用パネル5枚を申し込んだ。8月26日に出展各サークルの打ち合わせがあり、吉田氏が出席する。
- (2) 佐藤氏より、公民館祭りで今年も福祉についてのシンポジウムをおこなうこととなり、その内容について9月1日13時から再度打ち合わせを行うとの報告があった。佐藤氏か川上が出席することにする。
- (3) 企画担当吉田氏より報告と提案。
 - イ 公民館祭りの写真展示「鵜沼の今昔」は、地域を「海岸」「神明」「本鵜沼」「桜が岡、松が岡、藤が谷」の4地区に分け、それぞれ分担を有田、吉田、榛葉、川上と決め、古い写真の収集と現状の撮影をすることになった。福地氏、榛葉氏手持ちの写真も活用することとする。展示写真はカラーコピー、サイズはA3とする。8月19日10時から担当者の打ち合わせを行う。
 - ロ 7月15日に予定されていた茅ヶ崎市の文化資料館および平塚市立博物館見学会は、公民館祭りの終わった後の11月に行うこととする。
- (4) 会誌『鵜沼』編集担当鈴木氏より、以下の報告と提案があった。
 - イ 『鵜沼』75号掲載原稿は下記4編の予定。
 - ◇佐藤、野口両氏による「葛巻文庫と芥川龍之介資料展」開催までの経緯
 - ◇高三氏の「東屋の歴史について」
 - ◇若尾氏の「葉山家の人々」
 - ◇村川夏子さんの「村川堅太郎と松が岡公園」
 - ロ 会誌編集委員会を行うため、月1回公民館の部屋がとれないか。
（この要請をうけて、総務担当が8月は26日午後6時30分より、会議室を確保。今後も月1回とすることにした）
- (5) その他
 - イ 有田氏より「過日、公民館の飯島さんから、11月20日ごろ鵜沼ウォークを行う予定だが、スタート前に20分ていど、鵜沼について話をしてもらえないかとの依頼があった」という報告があった。高木会長にお願いし、公民館にその旨返事する。
 - ロ 佐藤氏より「鵜沼の古い家が次々と壊されてゆき、今のうちに写真なりビデオなりで記録しておかないと手遅れになる」との提案あり。市広報課、教育委員会、文書館など関係各所と連絡をとることとする。なお気がついた人は自主的に撮っておくようにという声も出た。
 - ハ 9月9日の例会の日の午前10時半から、村川夏子さんの「村川堅太郎と松が岡公園」の話を聞くことが正式にきまった。会員以外の聴講も歓迎。このため例会は午前9時半開始に繰り上げる。
 - ニ 高木会長の「日本土地所有制度の変遷」についての話あり。

（川上記）

【9月例会】（9月9日）

村川夏子さんの公開講演が行われたため、例会は午前9時半から同10時20分

までの繰り上げかつ短縮開催となった。

(1) 吉田氏より報告2件。

イ 公民館祭りの準備進行状況について

8月26日、展示部門の打ち合わせがあり、当会の展示場所は昨年と同様、ロビーの図書室そばの一角に決まった。割り当てられたスペースは図書室側壁面の幅5・2メートル、窓側の1・3メートルで、昨年の約半分であった。

会場設営は10月20日(月)、搬入日は同21日から24日。

当会の出展は、8月例会での決定どおり写真による「鶴沼の今昔」。各地区の担当責任者が9月30日に集まり、展示内容を決定する。

ロ 『合本・第1集』の配布先などについて

同集の残部は15部。

(報告を受けて、例会では、市教育委員会、同議会事務局、に各1冊、鶴沼中、湘南中、1中に各1冊、寄稿者辺見さんに1冊を贈呈することに決定。残部の扱いについては次回例会で決めることになった。)

(2) 有田、佐藤両氏から、「鶴沼の歴史的家屋の記録」について報告あり。藤沢ケーブルTVの市広報番組で、鶴沼の歴史的家屋を映像に記録できないかと、市文書館の細井氏に打診したところ前向きに検討する姿勢を示してくれたという。

9日夜、有田、佐藤両氏のお膳立てで細井氏、フリーの映像作家清水氏(以前、当会と協力して『芥川龍之介と鶴沼』を制作したことがある)と、当会の川上、鈴木(三)、西、六浦、佐藤、有田、高三、野口ら各会員が今後の取り組みについて懇談した。細井氏は「地元が具体的な行動を起こせば、市広報も清水氏も動きやすくなるはず」との見解を示した。

当夜の出席者が思いつくまま「歴史的家屋」候補を列挙したら33件にのぼった。当会としてはこの候補家屋をとりあえず地図上に落とし、具体的な行動に移ることにした。

(3) 編集委員会からの報告と提案。

『鶴沼』75号に掲載予定だった村川夏子さんの公開講座の記録は、次号に回すことに決定。

会則には『鶴沼』の呼称が「機関紙」となっているが、「会誌」と改めたらどうかと提案あり。次期総会で正式に変更することとし、とりあえず「会誌」の呼称を使うことになった。

また『鶴沼』の表紙に目次を掲載することにし、それに伴い意匠を多少手直しすることにした。候補作の中から希望多数のものを採用することに決定。

(4) 今年度の公民館祭りでのシンポジウムについて。

今年度は公民館に事務局をおく「暮らしと町づくり会議」と学習グループの共催で「老人福祉」をテーマに取り上げるよう公民館から示唆があった。しかし学習グループは教育問題を予定していたため、今年度は共催から降りることにした。

(5) 村川夏子さんの公開講座「鶴沼松が岡になるまで——なぜ緑は残ったか——」は例会終了後の10時半から行われた。40人を超える参加者があり盛況であった。

(川上記)

編集後記

- *第75号をお届けします。
- *昨年9月74号が出てからちょうど1年、これまでの年3～4回ペースを大きくくずしました。
- *これまで会誌の編集製作は吉田さん一人の責任で行われてきましたが、これではいけないと、今年4月の総会で会全体の役割分担が新しく決められたさい、会誌の編集委員会が設けられました。有田、高三、野口、松岡、鈴木の5人です。よろしくお願いします。
- *したがってこの75号は編集委員会の初仕事になりました。準備期間も十分でなく出来映えが案じられましたが、幸い編集委員以外の会員の方々のご協力もえて、「東屋の歴史」、「葛巻文庫が誕生するまで」などの力作を掲載することができまずの立派になったと信じております。
- *実際にやってみて判ったことは、このような手づくりの小地域誌を定期的に出すことは大変難しいということです。この困難な仕事を長年にわたって一人でやってこられた吉田さんに対し改めて心からの敬意を表すると同時にこの場を借りて厚く御礼を申し上げる次第です。
- *私どもは今後ともこの会誌を、会の目的である「郷土文化の研究調査、ふるさと意識の啓発、郷土愛の高揚」の達成にできるだけ役立つよう心がけ、そのうえで少なくとも年2回は出そうということを申し合わせました。
- *そのためには多くの情報を必要とします。鵜沼・藤沢在住の方々に限らず、一度でも鵜沼の地に係わりをもたれた方で、鵜沼の故事来歴についての資料・伝承などご存じの方は鵜沼公民館内「鵜沼を語る会」までお知らせいただければ幸いです。(鈴木)

『鵜沼』 第75号
平成9年9月30日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください。

編集・発行 鵜沼を語る会
藤沢市鵜沼海岸2-10-3
鵜沼公民館内
電話0466-33-2001